

## 「東北支援お手伝いショップ」から生まれた ならコープと南三陸町、心のキャッチボール

ならコープは、「東日本大震災ボランティアバス」、「東日本目的別募金」、「東北支援お手伝いショップ」など、さまざまな復興支援活動に取り組んでいます。2013年3月25日と26日の両日、ならコープの理事たちが視察研修のため支援活動でつながりのある被災地を訪問しました。

### ●水戸辺の女性たちとならコープのつながり

ならコープは4店舗で月1回「東北支援お手伝いショップ」を開催し、南三陸町戸倉水戸辺仮設住宅の女性たちが作った手芸品や戸倉の菓子工房「オーイング」の名物マドレーヌを販売しています。3月25日には、ならコープの訪問メンバー7人が水戸辺仮設住宅とオーイングを訪れ、復興を目指す人たちの声に耳を傾けました。

作業場でもある水戸辺仮設住宅の集会室には端切れや布地が積み上げられています。「この部屋にあるのはほとんどならコープさんから送られてきたものだよ」。作り手の松岡由香利さんが



手作りの革タグ。

がそう話すと、訪問メンバーたちもびっくり。「組合員は、お手伝いショップの手芸品の中に自分の送った布地を見つけるとうれしいみたいです」と木下健一さん（ならコープ 業務サポート フロア人事総務部）。

水戸辺で手芸品作りに携わっているのは現在7人。三浦幸子さんと松岡さんは昨年9月にならコープを訪問しています。今回訪問した理事たちとも前に会っているので「割烹着がほしい」「水戸辺オリジナルのものがあるといいよね」「入園入学シーズンに合わせてバッグや玩具入れを作ってみてもいいね」とざっくばらんに話が進みます。布製タグには「みとべだよ〜ん」の文字。水戸辺のチーム名のつもりで作ったそうです。革タグにも「MITOBE」の刻印。「こういうのが商品についていたら可愛いね」と理事たちも大喜びです。

ならコープ副理事長の中野素子さんは「組合員は、被災地の復興を応援するため、皆さんの“仕事”でつながっていきたいと思っています。お手伝いショップを開催するとみんな喜んで買っていくんですよ」と支援に込められた組合員の思いを伝えました。

### ●「高台に集団移転しても手芸品作りは続けます」

震災から2年が経過しましたが被災地はまだまだ復旧・復興の途上です。「現地の様子を見ていろいろなことを考えるのが大切。できるだけ多くの理事さんに現在の状況を見てほしいと思って、今回の訪問研修を企画しました」と中野副理事長。

ワカメの作業を終えて戻ってきた松岡孝一さんも途中から加わり、震災の時の話になりました。「沖合に船を出して一晩船の上で過ごした。帰りは海に漂うがれきやロープをよけながら戻ってきたんだけど、その途中生存者を3人助けたんだよ」。由香利さんも「あんな壁のような津波が来るとは思わなかった。家が叩きつけられる音が凄くて、山に逃げてから震えがきた」と当時を振り返ります。



前列、水戸辺仮設住宅のみなさん。  
後列、ならコープのみなさん

震災前、水戸辺には30数軒の漁業者がいましたが残るのは3軒ぐらいになりそうだと言います。「養殖いかなだから何からきれいさっぱり無くなってがれきだけ残った」と三浦さん。口調は淡々としていますがその悔しさは想像に余りあります。「後継者もないのに船を新たに造って家を建てるというのもちょっと難しいんですよね」（由香利さん）。

水戸辺の皆さんの話にならコープの理事たちは真剣に耳を傾けます。仮設住宅での不便な生活、町の人口減少……。

町は数年をかけて高台移転を進める計画です。「移転したらこの手芸品作りはどうなるのでしょうか？」と中野副理事長。「“みとべだよ～ん”は、移転しても水戸辺に残る人が続けます」。三浦さんが笑顔で応えてくれました。

### ●まだ大変な状況なのに、前向きな話をしてくださることに感謝します

ならコープの「お手伝いショップ」で人気の「お山のマドレーヌ」。その名の通り、メーカーの「オーイング菓子工房Ryo」は海を見おろす高台にあります。元はペンションだったオーイング。震災で休業を余儀なくされましたが、パティシエの長嶋涼太さんは「少し修理すればお菓子は作れる」と菓子工房として再スタートしました。「こんな時にお菓子を作っているのかと悩みましたが、周りから“やれ”と励まされ、決意しました」。資金も無い中での再開。冷蔵庫はボランティアで南三陸町に入っていたならコープの木下さんに依頼し、他県の同業者の支援などでオープンや包装室を整えることができました。「生協さんとのつながりができ、実際にこうして来ていただいている。地元の人やボランティアさんも買いに来てくれる。自分は恵まれていると思います。まだまだこれからですが頑張りますの



オーイングのパティシエ、長嶋涼太さん。  
ならコープの参加者へお菓子作りを通じて  
感じていることを伝えます。

で応援しててください」。

長嶋さんの熱い気持ちに理事たちも感激。温かいコーヒーと甘いお菓子で休憩した後、さまざまな焼き菓子の中からお土産を選びました。

窓の外には志津川湾が広がっています。「こんなに穏やかな海なのに……」。東日本大震災の津波を体験していなくても、三陸の海を見ると、ここで起きた光景を想像することができます。

「ニュースでは知っていましたが実際に津波を体験した人の話を聞くのは初めてで、とても貴重な体験でした」

「まだ大変な状況なのに前向きな話をしてくださる。辛さを胸の中にしまって明るく接していただいているんだなと思いました」。

「理事には帰った後、訪問で学んだことを伝え、組合員と一緒に考えていく役目があります」と中野副理事長。初めて聞いた話、現地で直接会ったからこそ聞けた話。多くの「言葉」が胸に刻みつけられたに違いありません。



オーイングの長嶋さんの話を聞く、ならコープの参加者。  
お山のマドレーヌ（右下囲み）。